

土 淨

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一日発行）
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別政務廳）誌第三五二号
 昭和三十一年八月二十五日印刷 昭和三十一年九月一日発行

第二十六卷

第九号



九月号



☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラク

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
尚編集の都合で大変遅れました事をおわび申
上げます。

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土 九月号 目次

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

人生のゆくえ……………林 靈 法……………(2)

——秋の彼岸に思う——

かわや念仏……………井川定慶……………(16)

入信の方便……………村上博了……………(12)

法然教学の基礎理念……………津村諦堂……………(6)

——選択の意義について——

高僧伝 山田弁承……………大橋俊雄……………(4)

法然上人の感化…………………………(20)

信仰相談…………………………(22)

——扉の御法話……………(32)——新刊紹介……………(19)

——童心仏心……………(5)——教学大会開催日定……………(8)

仏教習俗覚書(五)……………中村康隆……………(24)

浄

土

九月号

上品^{ほん}をねがう事は、わが身の
ためにはあらず。かのくににむ
まれをはりて、かへりてとく衆
生を化せんがためなり。これあ
にほとけの御意にかなはざらん
や。

法然上人御法語



人生のゆくえ

— 秋の彼岸に思う —

林 靈 法



暑い寒いも彼岸まで、ということ、暑い夏もすんで風のはださわりも何か一寸ひんやりする今日このころである。庭の池の上に枝をさし出した柿の木に、今年には沢山な実がついている。それがまだ青いのだが、ふっくらと目だって大きくなって来た。みのりの秋だなとはっきりうなずける。

私は春の彼岸よりも秋の彼岸にあたってひとしおいろいろのことを考えさせられる。幼ないころ母親につれられて「お彼岸参り」によく行った。お彼岸の大切

なわけがどういふものか、小さい子供の自分に解りようはない。ただ別院のひろい境内に、でんがくや芋のにた食べものやの屋台店が軒並につづいて並んでいる。見せ物やのぞきなどの喧騒な店が大声で客を呼んでいる。母親につれられてゆく私は、古いそうした食べものやと見せものやが目的であった。別院の大きな本堂には殆んどが年寄の参詣人ばかりであった。正面の阿弥陀さまの前に皆がのめり出て熱心に合掌しながら拜んでいるのである。その中にまじって母親も手を合せながら、感のきわまったように南無何弥陀仏南無何弥陀仏と拜んでいるのである。母親の傍に立ったまま、

私は正面の仏さまと母親の顔とを見くらべていた。その姿は子供心に本当に満足し切った本当に満ちたりたと言った様子に見えていた。そして、それは私の母親ひとりだけではなかった。どの年寄りも年寄りみんながそうであった。向拝にはそれはそれは足ぶみのならぬほど沢山な鳩が、クッククックとつぶやきながら群って豆を食べていた。

これは少年の日の懐しい思い出である。ひたすら合掌しているあの敬虔な姿の中にどんな大きな世界が生れているか、勿論子供の自分には解りようもないのである。ただお彼岸参りというものは、年寄と子供の境界だという印象が強く、そしてなにか楽しい日の感じを支えられて来ているのである。

ところが、私はその後学校を出て、そして社会へと、年がすすむにつれて、いつも秋の彼岸どきになると彼岸についてこんなことを考えて来ている。それは又真面目に考えれば考えるほど実にそら恐ろしいことでもある。少年の日にお彼岸参りに母に連れられて行ってみれば、それは小さい子供と年寄りばかりであった。言わば人生の出発に立つもの、そして人生の漸く終着駅に達しようとする人ばかりの世界であった。それなら

ば人生における一番に活動期にある若い人々はどこへ行ってしまったのだろうか。一番大切ないまの世の壮年の人々は一体どこに行ってしまったのだろうか。なぜこうした一番に大切な年輩の人々は、この彼岸という大切な行事に無関心なのであろう。

その理由を年と共に考えてゆくようになった。そしてその理由として、言うまでもなく今日の仏教が全く死んでしまっているからだということがしみじみと思ひあわされて来た。それならば、無信仰の現代の人々の生き方はそれでよいのかと言ってみると、決して、無条件によいと言いきることは出来ないのである。むしろ、荒野をさまよい歩く旅人にうしろから大声でよびかえしたいような気持をいだくのである。



彼岸というのは、此岸である現実のこの生活に対して理想の世界を言い、人生の帰趣するところを示しているのである。人間は理想なしには一日たりとも真剣には生きてゆけないのである。一つの目標をもって、それに一切をかけて生きてゆくのである。金や名誉を目的とする人もあろうし、社会改造とか人類の平和と

か言つた崇高な目的を持つものもあることだろう。しかし、こうした理想は言わばこの世、この世的のものである。言いかえるとこの人生の上に立つてもものを言っている人々である。人間はこうしたこの世、この世的のもの以上の、それこそ本当の彼岸である理想をもつことを必要とするものである。たとへこの世の奮闘努力の生活が終つても、人間はそれで万事が終つたのではなく、それからも、いやそれからこそ本当に永遠無窮に生きつづけ、てゆけるような不滅の世界を求めざるを得ないのである。私たちはこうした世界を持つことによって始めて、今日の一日、明日の一日が安んじ、安んじきつた、そして又深い感動をもつて生きてゆけるのである。それが法然上人の浄土教で言う浄土という広大な不滅の世界なのである。

社会改造によって理想社会を造る、世界の平和のために生涯を捧げる、これは実に人間として立派な行ないである。しかし、こうしたこの世限りの、いわゆる理想主義的なゆき方はまことに美しい姿ではあるが、ときとして目的のために今日の過程としての日々が手段化されて無意味に終ることになりがちである。性急に目的のためには手段をえらばずということ、納得

の出来ぬ手段方法がとられる。このことは、若い人々の日常の姿に見られるし、大きくはロシア革命などにおける暴力革命の悲惨な事実に見うける。しかも、目的の思うように地上に実現されざる場合には、深い懷述と絶望に陥ち入りがちになる。これに対しこの世、この世的でない彼岸の浄土の信仰に生きるものにとつては、彼岸たる理想の世界のために現実の一步一步を犠牲にするということはあり得ない、いかなる逆縁逆境にあつても、常に安んじて行つて進むのである。今日一日が真剣に生きること出来ずして、どうして未来永遠に生きつづけることが出来よう。浄土教の信仰がややともしれば此岸のこの現世を無視してひたすら彼岸の憧憬にのみ生きようとする信仰に解せられるところもあるが、それは浄土教信仰を概念的に見るからそうであつて、現実の信仰は絶対にそうではないのである。浄土という彼岸は此岸をはなれて、固在的にあるものではなく、私たちの現実の日々を浄化し、向上発展せしめるための実体力であつて、常に私たちの現実たる此岸の中に働き出ているのである。法然上人のお歌に「月影のいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ」とあるように、私が真実に合掌しゆくところ、い

づこにも浄土の光ははつきりといたたくことが出来るのである。この光、この温い力にまもり育てられて進むところ、このよろこびの生活、この感動の生活が、そのまま命終れる後までも浄土の世界にめでたくおさめとられると共に、未来永遠に生きつづけてゆくものとなるのである。

まことに、不滅の世界、常に活動やまざる彼岸の世界をもちうる人は、人間として最大の仕合わせものであるだろう。それは現実の一日一日の生活に、いかにめぐまれぬとも、無限の生き甲斐を支えておるからである。いまの人々にはこの世界が失われている。この世限りの目標、理想主義的な目的のみであっては、人生の本当のゆくえが見失われている。それでは丁度まっ黒暗の中をばく進んでいる車のようなものである。いつ転覆するのも知れないのである。人間の命は決してこの世限りのものではない、死んでも死なぬ大きな彼岸の世界に生きつづけてゆくのである。この広大な無限の世界を感得せずして消えてゆく現代の多くの人々を思うとき、まことにそら恐ろしいせんりつをさえ感じてくるのである。「旅人よ、そちらへゆくのは危い。こちらだ、こちらだ」思わずこう叫びたくなるの

(童)(心)(仏)(心)

雑草の歌

草が伸びる。伸びる。一週間手入れをしないと、狭い庭に雑草が生え広がる。

そこで、日曜日の半日を利用して、子供と草取りをしたが、はじめの一時間は良いが、後はいけない。やれ、友達と野球をするのだとか、テレビで今良い番組をやっているとか言って、とうとう逃げ出してしまった。そういう私も、だんだんと能率が落ちて行く。

そこで考えた。毎日十五分。朝食前にまったく無言の行で、雑草を抜く事にした。

「きょう、やる事、しなければならぬ事を静かに考えながら、一本一本、ていねいに抜くんだよ。だまって。だまって。十五分だけ。」

これで万事解決。貴重な日曜日は、雑草と取り組まなくともよし。朝食前の十五分で、私は仕事の段取りを考え、子供は学校の時間割にそって計画を立てる。然も、心の雑草までが、朝日を浴びて取れていくのである。(淵)

である。

秋はみのりのときである。人間は夫々真剣の目標を求めて生きねばならない。そして人生の秋にはそれぞれのみりをもたねばならない。私たちは生くる日の間に真実のみり、本当に不滅の世界に生きることをもとめてやまない。

(東海高等学校長)

法然教學の基礎理念

——選択の意義について——



津村 諦 堂

(一)



法然思想の根底をなすものは「只往生極概のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞとおもいとて申すほかには、別の仔細候はず云云」(一枚起請文)と云っている如く、往生極楽の要因を一向専修の念仏に置く徹底した念仏為先思想である。

法然が如何なる根拠に基いて往生への万行の中から念仏一行を選び取ったかを論述したものが云うまでもなく建久九年(一一九八)九条兼実に送った選択本願念仏集である。

これは唐僧善導の釈に偏依して一切の聖道門は往生の正行ではないことを明し、浄土門こそが往生の正行たることを証明したものである。即ちその第十六章段に

「はかりおもんみれば、それすみやかに生死をはなれんと欲せば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門を捨て選んで浄土門にいれ、浄土門にいらんと欲せば正雑二行の中に、且らくもろもろの雑行を捨て選んで正行に帰すべし、正行を修せんと欲せば正助二業の中には、猶助業を傍らにし、えらんで正定をもちにすべし、正定の業とは、すなわち是仏名を称するなり、名を称すれば、必ず生ずることを得、仏の本願

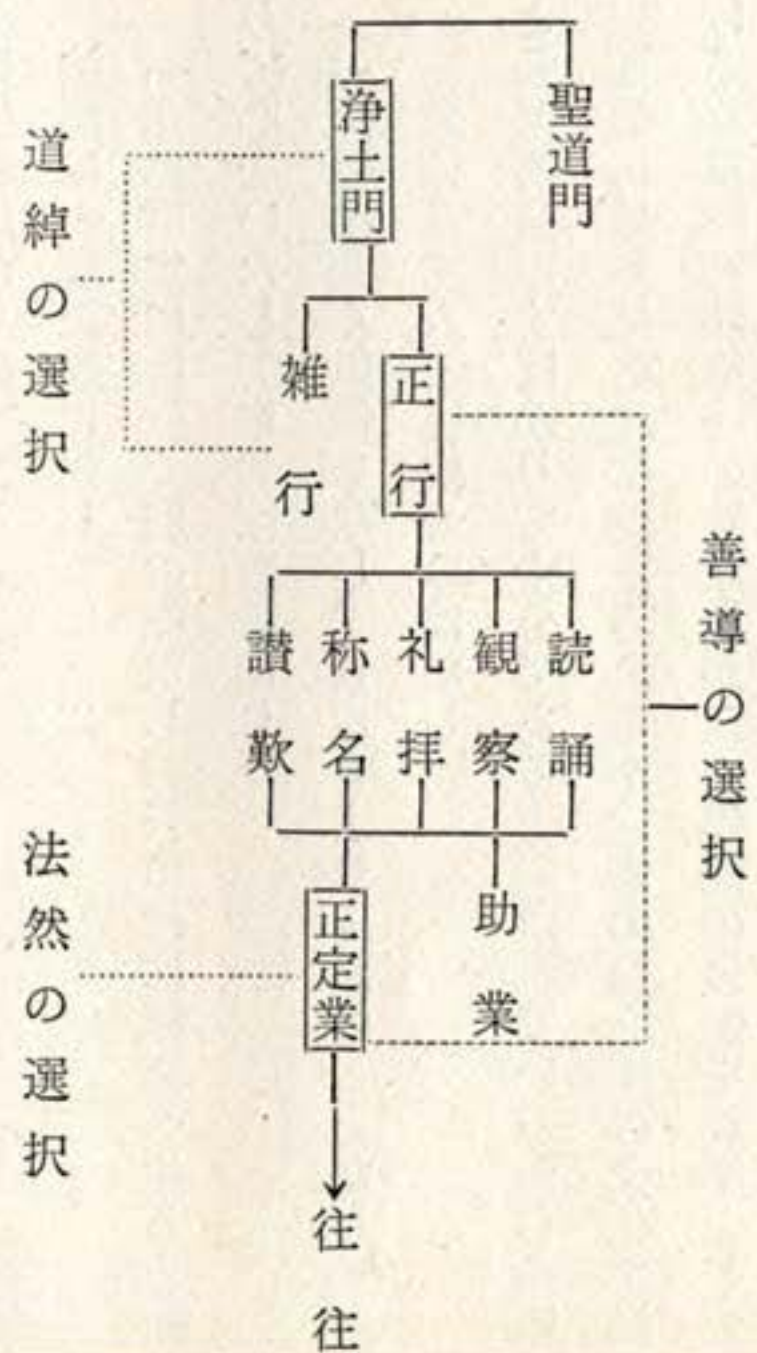
に依るが故なり」と云い仏名を唱えることを往生の正業と断言している。卷本、卷末十六章段にわたって説かれた此の書の内容は浄土三部經典を始めとし、数多くの經典及び中国、日本の先師の論説、註釈を縦横に騷使引例して、念仏名の意義とその作用に就いて詳述されている。

さて然らば法然が称名念仏が往生浄土の最勝最易の行であることをどのような根拠に於て選択したのであろうか。それは勿論道綽、善導の教説の中に基いている。

即ち道綽は聖道門と浄土門の中浄土門を取って浄土教を行ふものを正行、以外を雑行とした。そして二行共に浄土門の行とした。善導は往生の正行を浄土行とし、余他の行を雑行として斥けた。そして正行を読誦、觀察、礼拝、称名、讚歎供養の五種とし、更に五種の中称名を正定業とし他の四を助業とした。従って道綽は浄土門を選択してその中正行と雑行を認めたのに対して善導は雑行を捨てて正行だけを取り之を前述の五行に分けこの中称名一行を正定業とし他を助業としたが正助二業を共に往生の行として認めている。法然は善導のこの思想を受けて正助二業の中助業を抛てて正定業一行を選択したのある。斯くして浄土門は法然に依って称名念仏の一行に決着し、「往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞ」と思いとりて申す外には別の仔細候は

ず」(一枚起請文)と選択されたのである。

これを図を以て示せば



斯くして浄土門は道綽、善導、法然と三選を経て純粹化され独立せる教説として完成されるのである。

ところで選択が道綽が聖道、浄土の二者の中浄土をとり、善導が正雑二行中正行を選び法然が正定業助業の中正定業を選択すると云う二者択一の形を取って純一に高まるのであるが、純一化された正定一業は単一無内容なものではなくむしろ逆により豊富なる内容を包む綜合統一された一者である。否定の否定に依って止揚されたヘーゲルのジンテーゼの立場を思わしめる。従って法然の選択の意義は包摂を意味するものであると考えられる。

かの一枚起請文に

「たゞし三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり」とか、或は

「南無阿弥陀仏というは別したることに思ふべからず、

阿弥陀ほとけ我を助け給へということばと心得て、心には阿弥陀ほとけ助け給へとおもいて口に南無阿弥陀仏と唱うるを三心具足の名号と申すなり」

—法語—

という三心即一の思想、或は

「善導の釈を拝見するに源空が目には、三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり」—授手印—と云う言葉は称名念仏が融合摂取の高次元のものであることは明らかである。この意味に於て選択とは単純化ではなくむしろ綜合を意味するものと考えられるのである。従つて選択された称名念仏即ち本願念仏は万行をその中に包摂する一者であることが明らかである。

従つて法然に於ける選択の意義は多の中から一だけを選び取るということではなく多を一に包摂融合させる挙一全収、一多無礙の思想であつて良忍の思想に極めて接近していることが考えられる。

(二)

斯く法然は道綽、善導の思想を受けて称名念仏が往生浄土

の最勝最易の行たることを確信して念仏系別立の大決意に踏み切つたのであるが、その理由として弥陀仏の念仏行者を必ず浄土に生れさせなければ不取正覺と云う仏の本願に順ずるからであることを到る所で主張されている。

「念仏行者は少智少見、破戒無戒、極悪者、賤業者すら極楽往生可能である、それは彼の仏の願に順ずるが故に」之は法然の一貫した基本的主張である。

然し乍ら往生の行は念仏を光と為す、その根拠は弥陀仏の本願に順ずるからと云う法然の思想は一朝一夕にして作り出されたものでなく、三十年の仏教々説に対する研究と思索の結果生れ出たものであると思う。

法然は一般民衆に対しては常に、
「念仏申すには全く別の様なし、只申せば極楽へ生ると知りて心をいたして申せば参るなり」

「念仏は全く風情もなし、只申すよりほかのことなし」

「念仏申す人の往生せぬはなし」

と云つて只申すばかりで十分であると説かれているから一応表面的には単純無難に受取られるが、この只一唱の念仏を掲げる為には智慧第一の法然坊が三十年間の思索を必要としたものであつた。

然らば法然が「念仏だに申せば往生疑なし、それは彼の仏

の本願に順ずるが故に」と云う大信念を得た根拠は奈辺に在るだろうか。

又往生の決定原因たる順彼仏願故は何を意味するであろうか。

云いかえれば

「念仏は往生の由因である。」

何故なら仏は念仏行者を必ず往生へ導くことを本願として
いるから、

だから只念仏だに申せば往生は疑なし

と確信した法然の心的根拠は何であろうか。それは「順彼仏願故」だからであるを以て満足し得るであろうか。それは私一人だけであるかも知れないが、ここに私は法然教学に対する従来の学説に嫌たらなさを感じるのである。

先に述べたように法然は三十年を思索に費している。その結晶としての「只念仏だに申せば往生疑なし、順彼仏願教」である、然しこの言葉は尼入道の無知のともがらへの方便としての言葉として受取るべきであって、之を法然の思想の凡てであると考えすることは法然思想の表皮的理解に終ってしまふことを考えるべきである。

この一見単純無雑の言葉の奥に法然の真意を吸み取らなければならぬと思う。

当時随一の仏教学者であり、哲学者であり、思想家であつた法然の思想は然く簡單無味のものではないことに目を向け
るべきであると思う。

まして七百五十年後の今日に於て如何に精密なる解釈を施してもそれが表皮的なものに終始する限り法然の深遠なる思想は現代人の心を打つことは不可能である。

一枚起請文に示される如く「学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず」「智者のふるまいをせずして只一向に念仏すべし」は念仏行者の心構いを説いたものであつて、法然の思想が学問的根拠が無いと云うのでは決してない。「只一向に念仏すべし」と云う結論を掲げる為には法然は一代を思索と研究に捧げているのである。云い換えれば法然哲学の結論であつたのである。

從來なされて来た法然教学の研究はその現象だけに注がれて来たきらいがないであろうか。現代を導くものは「順彼仏願故」の信仰だけではなく、これを支えている法然の哲学的思想内容が必要である。つまり、信仰と理性との統一に於ける念仏の意義である。そしてこのことこそが法然上人を現代に生かす唯一の道であると確信するものである。この意味に於て念仏を通して弥陀仏に帰一すると云う信仰を哲学的に基礎づけることが今後の法然教学研究の進むべき道ではないか

と思う。

(三)

さて然らば法然が仏の願に順ずるが故に称名念仏が往生への最勝最易の道であると選択した根拠は何であるだろうか。言い換えれば「順彼仏願故」の基礎は何であるだろうか。

それは本師仏陀の眞精神たる

(一)一切衆生悉皆成仏

(二)人間苦惱の超克

が称名念仏に依つてのみ最勝最易に解決され得ると云う確信に外ならないと思う。

念仏は万人の成仏への道であると云うことは正しく一切衆生悉皆成仏の裏づけであり、

「六方垣沙の諸仏が念仏行者を護念し、諸悪鬼神を遠ざけ、横病横死等の一切の災障を消滅させ延年転寿を得せしむ」(選釈集十五章段)と云っているのは第二の人間苦惱解決を念仏に基礎づけているものであると考えられる。

法然の修学した当時の仏教諸派の教説も同じく出離の道であり、成覚の業であり、浄土への通路ではあった。然しそれらは持戒持律或は造塔布施、或は仏説の学問的理解と云う難行道であり万人可能の一般的行ではなかった。法然が云っているように目しえ、足なえたる者の多かった当時の末法社会

に於てはこの聖道門によつては万人成仏は不可能であつた。

万人に仏性を認めた仏陀が万人可能の成仏への道を説かない筈はない、「必ず有る」と云う確信が法然の根本的求道であつたと思う。

法然の浄土教は平安時代の浄土信仰に基いていることは云うまでもないことであるがそれらとは全く質を異にしているものである。

即ち浄土信仰は遠く飛鳥奈良時代にも有り、特に平安時代の後半に於て盛んになり、天台法華宗の般舟三昧の念仏、円の東塔の常行三昧堂、増命の西塔常行堂、或は良源の横川常行堂に於ける不断念仏、又法性寺東北院の不断念仏、その外法興院常行堂など天台各寺院の各寺に流行して盛んに念仏会が催され、「朝には法華三昧に住して円頓一実を觀じ、夕には念仏三昧に入つて心を安養九品に遊ばしむ」(廬山縁起)と云っていることを見ても如何に念仏が流行していたかがうかがわれる。

又ひとり天台だけでなく真言、華嚴、法相三論などの各宗にも取入れられ、更に当時の異色的存在であつた修験者の中にも滲透していた。

空也(九〇三—九七三)、源信(九四二—一〇一七)、慶滋保胤(九八六出家—九七二)、良忍(一〇七二—一一三二)等は代表

的念仏行者であつて貴族化、世俗化した聖通門宗派に対するレジスタントとして念仏を市井の庶民に勧奨したのであった。

ところがこれらの念仏は自己往生の法であると共に死靈鎮送のためのものであり、その信仰の在り方は当時の天台真言に依存し、神祕的祈禱呪術の実修と苦行的、数量的、修行的念仏であり聖道門的色彩を多分に含んでいるものであった。

法然はかかる状況の中に於て仏教を学び、三十年の思索と研究の結果、仏陀の真精神に則した阿弥陀仏の本願に基く真正浄土教を確立したのである。飛鳥、奈良以来の浄土信仰が一つの独立した浄土教としてアウフヘーベンされたのである。

ところで法然修学中の聖道門教学及び浄土信仰は前述の如く持戒持律写経或は造塔起像布施を往生の条件とし、或は朝廷貴族の葬送死靈鎮送の呪術として、或は臨終の際の断魔念仏として凡そ仏教の正道を踏み外したものであった。一切衆生悉皆成仏、一切の人間苦悩の超克と云う仏陀の真精神はここからはその片鱗をすら見出せなかったのである。

凡ての人を浄土へ導き得なければ自ら仏にならずとの大誓願を以て凡ての人を護念し給う弥陀仏への絶対的信頼を以て唱える念仏こそ本師仏陀の真精神を最も適切に具現するもの

であると云ふことの確信が法然をして万行の中から本願念仏を選び取らせた究極の根拠であり、これが法然の基礎的理念であつたと思う。かくして法然は、成仏の爲の主体性を自我に置く聖道門に対して主体性を超越的な弥陀仏に置く即ち自力から他力へ、仏教を倫理的立場から宗教の立場へ止揚させたのである。

然しそれはヘーゲルの全体的絶対精神の中に個人が消滅し去る如きものではなく飽く迄も有限の人間の立場から超越者たる弥陀仏に称名念仏を通して帰一するものであり、この限りキリスト教の神に接近すると共に実存主義的色彩を帯びるように考えられる。

斯くして法然は仏陀の真精神たる一切衆生悉皆成仏、一切人間苦悩の超克の教説を打立てたのである。

以上私は法然思想の基礎理論とも思われる選択の意義とその根拠を考えて見た。然しそれは尚浅薄の域を脱しない。勿論念仏だに申せば往生間違ひなして云う法然の言葉を疑うものではない。然しこの弥陀に対する絶対信仰こそ浄土教の真髓であることの確信が強ければ強い程このことに対する検討を深めねばならないと感じられるものである。

特に現代の精神状況は信仰の満足よりも理性の満足を追求している。

入信の方便



村上博了

一

それは文治五年の春のことであった。きびしい寒さも梅の花と共になごみ、稀には小春日和もある頃のことである。

京都大炊御門左大臣藤原経宗と云う一こくの人があつた。古稀をすぎたので陽気の変化は人一倍感じ易かつた。

彼は王朝末期仁安元年十一月一日に左大臣となつた。四十八才である。殿上人の強い誇りをつねに持っていたのであつた。

元暦二年三月廿四日平氏一門が西海壇の浦に亡び、八月十四日文治と年号が改められ十一月二十九日、源頼朝は相州鎌倉に在つても守護地頭を全国に配し、全国の実権を握つて

四年目であつた。

経宗公は左府となつて二十三年の長きに及んでいた。

斜陽族ではあつたが末法思想も何のそのと云うなかなか豪気の公卿であつた。

二

大師法然上人はこの年五十七才であつた。

承安三年春浄土宗を開き、四明岩洞を降つて丁度十五周年に当る。

三年前の文治二年秋、京都大原の里魚山勝林院に於て、当時高名な南都北嶺の碩学者僧達と「浄土を語る会」世に大原問答と云われる会合があつて、世人が浄土信仰、大師上人のお念仏に同化しつつあつた頃のことであ

る。

併し大師上人は来訪者には、法を説きお念仏の功德を伝えられたと云われるが、そのような消極的の面丈であれほどに一世を風靡したとは考えられない。

大師上人も時によつては積極的でないこともないであつたろう、或は方便でだておも用いられたろうことは、当然あつたものと考えられる。かような意味で勅修御伝を見たならば、左府経宗公のことが目についたのである。

三

経宗公は、日頃は信仰については何らの考えもなかったらしい、一遍に御用大事につとめて廿三カ年間に及んだ訳である。七十一才と云う年令を聞いては、後世菩提について考へてもわるくない。

併し信仰は機が熟さなくてはならない。丁度果実のようなものである。青いうちに無理に熟さそうとしては、自然の理にもどることとなる。信仰は無理であつてはよき結実は得られない。

肥料や水をやったり風よけを作ったりしな

くては、よき果実は得られない。

本人には知らさずとも、よき機会を与えることは大變結構なことである。

經宗公七十一才文治五年春、陽氣あたりから病氣となった。公に親近のある人が、大師上人に訳を話して、知識として請待したのである。

併し本人の希望でないし、常日頃信仰には縁のない方であった。病氣の時に、すすめては、本人がもはや駄目だと皆が見込んで、いよいよ上人を請待したと思われては親切が無駄となる、どうしたものであろうかと迷ったのであった。遂に大師上人にその心労を語つて、よき方法や如何と云うこととなった。その時大師上人は、ある方法を立てられた。それは公とは屏風をへだてて、ある弟子僧と法門の応答を行われたのである。公によく聞かせようとしての「はかりごと」であつた。

内容は、釈迦如来の苦心から正しい信仰は生活の支柱であり、明るい住みよい社会の基盤である。

人にして信仰心が無い時は、人に目鼻がないうようである。信仰のない生活は、例えば、

行くべき目標のない旅のようなものである。目標があつて方法を立てすすむことは、来世の功德をみ、人として心ゆたかに活す所以である。殊に念仏を申して、阿弥陀如来はじめ観音勢至両菩薩の来迎をうけ、船にのつて河川を渡るように無理なく自然に願海には入つて往生することが出来ることを、ねんごろに語りあつたのである。

公は病床にあつて、つれずれでたいくつきつてゐる。聞くともなしにきく仏法の大事念仏の有難さは、公をして自然に入信の動機となつた。心に灯が始めて灯つたのである。病苦は次第に信仰の灯によって消され、お念仏を申しては、成るほど有難いものだ、如来本願力の功德は、公の心を次第に明るくし、大死一番悟るところがあつた。御伝には、左府これを、きゝたまひて、信仰の心おこり

と伝え、これから

一すぢに、その勸化にしたがい、帰敬他にことなりき

と云う。

私共は、ここに大師上人の、つきぬあたた

かい思いやり、仏者の相^{すがた}を見る。本人の神経をいらだたせず、丁度水のひくい方に流れるように、自然入信の機が出来た。

公にするならば七十一年の生涯始めて知る心の喜びである。人間として最高の喜びは、あいがたくして如来の光明を仰ぎ、願海には入った喜びは、独りきて独り去る人生に、かけがいのない喜びである。公はお顔色も活き活きとつねに生かされる感謝に充ちたのである。

二月十三日、大師を戒師として出家された二十七日にはいよいよ病重くなり、大師上人は善知識として召請された。大師は臨終の儀式に従つて、頭北面西、西の方に如来の像をかけ、念仏助音された。やがて公は正念往生されたのである。御伝には、

大師上人の、こゝろばせ、まことに、かしこくぞ侍りける

と記されている。

大師上人は、誰にも平等にあたたかく接された。無理のない方法をとられたところに、末代相應の浄土宗の在り方があつたのである。



近代高僧伝

山田 弁 承

はてしなくつづく濃尾の平野が揖斐川によ
ってさえぎられ、木曾の清流と合一するところ
美濃国海津郡はデルタの上におかれている
が、その揖斐川に面した西江に左京が呱呱の
声をあげたのは天保十二年六月廿九日のこと
であった。山田治兵衛の三男として生れた左
京が城山行基寺の承誉大基を拜して得度をう
けたのは嘉永三年十歳の時のこと、名は恢承
(後に弁承)と改められ、その後増上寺学寮
に入って宗余乗を学んだが、偶々帰省の道す
がら学友赤坂長福寺の大江学翁にすすめられ
るがままに一夜の宿をここに定めた。この時
「吉田の悟真寺で後住を物色中だが仲々思う

ように見当らないらしい、どうだ君がいつて
は」との話に、一度はためらったものの、何
れ師籍をはなれなければならない身。それに
しても終生止住するとなれば寺産というより
も、朝夕お仕えする御本尊様のお姿を拜して
からでなければ何とも申し上げられぬとい
う。彼の言に動かされ、早速夜明けをまって
悟真寺を訪ずれた。所が本尊を拜するに御相
好は円満端麗なお姿、すっかりほれこみ後任
住職を内諾し譲誉祐巖と師弟の約を結び悟真
寺に入ったのは明治九年十二月であり、同十
四年六月には知恩院の事務総長となった。彼
はその後宗務所に出たこともあったが、門主

養鶴徹定が古典籍に興味をもち在山中四十余
万円にもものぼる負債をのこし、これが整理の
ため野上運海門主より請われて再び上山し、
知恩院執事長の職につき、時に白旗辨智は執
事に就任、爾来わらじばきで全国の寺院をあ
まねく歴訪して寄付を勧募された。知恩院は
今や強制執行をうけようとしている、何とか
して負債をかえし祖山を泰山の安きに置かな
くてはならないという緊迫感は、出来るだけ
多くの資金を得、一日も早く祖山の面目を発
揮せしむるようにしたいという心願となって
あらわれた。彼等は始めから寺格と資産をも
とに割りだした各寺の目標額を一応予定し、
勧募にでかけるや思うだけ出してくれなけれ
ば何時までも帰らないというしぶとさ、その
大胆さには皆驚いたが、それが私心からでた
ものではなく、祖山復興のためと知った時、
かえって喜んで言われる通り出したという。
その頃のこと、彼の名声を耳にした長崎大
音寺では後任住職になってほしいと、幾度び
となく申し入れられた。しかしそのつど辞退
はするが容易に長崎方の聞きいれる所とはな
らない。業をにやした總代の方々が、らちが

あけぬがままに豊橋まで訪ずれた時、彼は「それでは仏勅を仰いできめようではないか」と言いより、おみくじを二本つくって仏前にそなえ、別時念仏を修したのち開いてみたところ、「悟真寺にとどまって法を弘めるように」との仏勅であった。かくて長崎へも行かず、只ひたすらに自分の進退を弥陀にまかせた彼の厚い信念は、在山九九年にして知恩院の負債を償還するというまでの好成績をあげ、この功に報いるため門主は緋衣を贈り、一宗は彼をして大本山清浄華院の法主に推し、辨智は越前西福寺を董ずることになった。明治三十一年九月のことである。

師はそれ程強くたくましい信念をもっていたが、厳格な中に愛情もあつた。清掃は特にきびしく障子の棧を指先でなでて埃の有無を調べることも屢々であり、境内には塵一つとどめることすら許されず、そして肉食をさせた彼は魚形をした菓子でさえも口にすること嫌った。所が或日弟子達は謀って肉食しようとしたことがあつた。小僧をはしらせて肉を買いにやった中僧は、本堂から書院までの全ての戸をとざし、音をたてて沈香をたき、

においが弁承のいる奥に伝わらないようにし大僧は料理にかかったが、偶々これを知った弁承は厳しく意とするところを教示した。その反面小僧たちの面倒はよく見、夏の夜など蚊帳の外にのり出してはいまいかと、一度は必らず見廻わること常とし、良いことはあくまで良いとして讃嘆し、悪いこと法に背くことの全てを徹底的にしりぞけた。四十四年三月祖山知恩院では宗祖法然上人の七百年御遠忌が勤修され、その後門主山下現有は老軀

その職にたえないということ御辞意をもらされたことがあつた。門主の真意は御自身を身をいとわれてのことではなく、後進に道を譲りたいという心の発露で、時に門主は八十一の鶴齡を重ねられていた。此時何処からどうもれたか浄土教報に「浄土門主引退、後住に山田大僧正推戴」という記事が三回に亘って出された。これを見られた彼は早速に執事長神谷大承、執事曾根篤承の両師を召し、教報を手にして「お前等は浄土宗の正規を何と心得ているのか、本宗では増上寺の法主が後任門主ということに決まっているのに、私を推戴するというのは何たる不都合なことだ」

と剣もほろろに、何も知らぬ両師をしかりつけたこともあつた。本山法主就任順よりすれば彼は最も早い、増上寺法主堀尾貫務は最年長の八十四歳であり、彼は七十一歳になつたばかり。従つて安譽貫務大僧正を推すのが自然であるというのが、その本心であつたが、その後門主に辞任のこともなく沙汰止みとなり、氣まずい思いをせずすんだことは幸いであつた。

これより先 浄華院在住時、御遠忌を記念し四十二年二月木曾松一千本の払下げをうけ、「ふし」なしの材で御影堂を再建し、四十四年工成り、三月二十五日落慶入仏式をあげ、此日大僧正に叙せられ、つづいて七百年御遠忌を奉修。その後疲労と安堵のために偶々病床に臥す身となり、遂に十月七日、七十歳をもって遷化せられた。法名は正蓮社念譽上人観阿弥陀仏辨承大和尚。

(大橋俊雄)

×

×

×

×

かわ屋念仏



井川定慶

一、和歌の才能

念仏の元祖法然上人が十八才から四十三才まで二十六年間一切経ととつてくんで仏教の研鑽を積み重ねられたのだから其の師匠の叡空上人と戒体論をたたかわしたり、観仏称名の勝劣論で渡りあって勝ったところで別に不思議がる程のこともなく寧ろ当然とうなづけるのであるが、此の元祖上人が和歌の才能を発揮し、また別に絵心があつて自分の肖像画を補訂せられた等々の話

を聞くと、偕てどこで修業せられたかといふかしくなるものである。

法然上人を主題に取扱つた「法然上人絵伝」というものは国宝、重要文化財指定のものを含めて十数種百数十巻に及んでいる。こんなことは他に隔絶した驚異的存在である。それと同時に上人の御影がまた他に類例のないほど多いのである。重要文化財（旧国宝）指定三点以外に優秀なものが十点ばかり算えうるのである。其の中に「自ら鏡をとつて自らの姿と其の肖像画とを見

くらべ胡粉を塗って訂正された」という伝説のついた『鏡の御影』なるものが二、三あるからである。

宗教の達人ともなれば絵画にも歌道にも自ら通ずるものが内に湧いて来て発露し、よき芸術作品となつて残されることになるのであらう。

二、かわ屋の絵

浄土宗の寺に生まれ育つた自分は幼少の頃から法然上人！ 元祖さま！ を身近かに感じ乍ら何となくお偉らい優れたお方とすることにきめてしまつてゐる。京都大学で国史を専攻して日本文化史上に於ける法然上人の浄土開宗と念仏弘通の重要性を一層脳裡に刻むことになつたが、偶々江州湖西の真宗寺院から流れ出た法然聖人絵（奥書釈弘影）という残欠本を同学の江藤徵美師の厚意で拝見するに及んで其の内容が従来何れの法然上人絵伝とも異つてゐることを知り、学界に発表して認められ同絵巻は国宝に指定されたが、さて其の同類本が尚お三、四巻ある筈だと諸方探索するうち

に、今は亡き内藤湖南、沢村専太郎兩教授の御紹介を得て神戸川崎武之助氏方で同類三巻を発見した。其の朗報は朝日新聞本紙で全国に報道されたのであるが、其の中に上人がかわやに入って

かわ屋にて申す念仏のとがあらば

召しこめよかし弥陀の浄土へ

と、称名する場所の浄不浄を選ばずということに歌によせて云い放たれた場面があった。興味を添えたものである。前述の朝日新聞にも確か此の写真が大きく掲載されていた。

三、国宝の東司

洛東臨濟宗大本山東福寺の選仏場の南に禪宗式の廁があり、足利時代の再建である。外面に格子窓を付け、東部の一面に入口を設け内部は鏡天井、土間、そして其の左右両側面に廁が設備されている。禪刹の東司（廁）の古い形を窺うのに唯一絶好の参考品だということで夙に国宝に指定されて

いるのである。今一つ三門の東に天文年間に建てられたものもあるが。然し此の廁は禪刹式であり中国風であって日本式のものではない。それにひきかえ、我が法然絵伝に見える「かわ屋」は純日本式で上人の前に大きい高いキンカクシが立っている。

法然上人絵伝は其の名の示す如く上人を主題にして上人の伝歴、念仏の教儀、教化法難、弟子の振舞を敘述するのが主眼ではあるが当時を物語る風物が点在していて建築史、風俗史、戦役武勇史、燈光史等々に材料を提供している。

四、投げ松明

東大寺の大仏殿は平重衡に焼かれ、鎌倉再建のものは戦国時代に松永弾正に焼討ちされ、第三代目のものに補習を加えたのが現在の大仏殿である。

ところで法然上人の南都遊学の場面で重層の雄大な大仏殿が描写されている。時代から推せば天平のものであろうが、絵巻に出来たのが鎌倉末期であるから或は俊乗房勸進建立のものを時代を超越して描いてい

るかも知れぬが、兎も角現在の大仏殿より古い建造物である。此の上人絵伝に出てくる東大寺大仏影は日本建築史の史料となっていることは確かだ。故天沼俊一博士も珍重せられていたものである。

また上人誕生の際の「鳴弦の作法」や門前に張る「大注連縄」などは有職故実家を喜ばせるし、源内武者定明が乱入した夜討の場面に於てあちこちに「投げ松明」が燃え盛っているが、今という暗夜を照らす照明弾の先行武具なのである。

また夜を徹して上人が読書された際の燈明が、鎌倉時代の燈具研究の材料であり、小児の穿つ草履、下駄の「はな緒」がまた今と異っていて注意すべきものを提示している。

五、落題の歌

偕て上人が何の技巧も凝らさずすららと詠まれた和歌で勅撰集に入っているものも二、三数えられる。宗歌となっている「月影のうた」は『続千載集』に入り

むまれてはまづおもひ出んふるさとに
ちぎりしものふかきまことを

は新千載集に撰まれている。また

しばの戸にあけくれかゝるしらくもを
いつむらさきの色にみなさん

と勝尾寺でよまれたものは『玉葉集』に採
用されている。

上人が配所の讃岐国塩秋の地頭駿河権守
高階時遠入道西仁が館におちつかれて美膳
を献じ薬湯をたてての歓待を喜ばれたこと
を前記の法然聖人絵（弘願本）に

これを御覧じて上人の御歌

極楽もかくやあるらんあらたのし
とくまゐらばや南無阿弥陀仏

阿弥陀仏といふよりほかは摂津国の
なにはの事もあしかりしぬべし

と記し、其の後讃岐の松山の桜をみんとて
同行達と出かけられ人々面白さの興趣涌く
まま一首宛よむことになったという上人は

いかにしてわれ極楽にむまれまし
みだのちかひのなきよなりせば

と披露さる。

「人々この御歌落題に候、松山遠流の
けしき候はずと難じ申ければ、さりと
ては所の面白て心のすめば、かくいは
るるなりと、仰せられければ皆なみだ
落としてけり」

と応答されている。

上人は桜をよむのでもなければ遠くはな
れた配所の心境を告白することもなくただ
念仏往生のみが常に胸中を去来していたの
である。

されば「人の命は食事の時むせて死する
事もあるなり。南無阿弥陀仏とかみて南無
阿弥陀仏とのみ入るべきなり」と茶飯事を

いましめ、「たとひ余事をいとなんとも念
仏申し申しこれをするおもひをなせ、余事
をして念仏するとは思ふべからず」と生活
即念仏なることを強調さる。

殊に流罪という普通ならば重大衝激をう
くべきところを

「念仏の興行洛陽にして今久し、辺鄙
におもむきて田夫野人をすゝめんこと
年来の本意なり。然れども時いたらず
して素意いまだ果さず、いま事の縁に
よりて年来の本意をとげんこと頗る教
恩なりといふべし」

と悲観するどころか却ってニッコリ感謝し
て四国への旅へ出かけて行くというのも毀
誉は慮外で、ただ念仏弘通のみが上人の脳
裡にあったからである。

第六回浄土教学大会

開催日程

十一月二十二、三の両日
京都 仏教大学に於いて

文学博士 竹中 信 常 著

宗教儀礼の研究

竹中信常博士は、単なる学者ではない、生活の中に学問を生かし、学問によって生活を深めることを常に考え、実行しているものである。

今回出された「宗教儀礼の研究」は、今回博士の学位請求論文である「比較宗教学よりみたる儀礼の理論と様態」の一部である。

題名から受ける感じは、あまりにも学究的で一般人には理解出来ないのではないかとと思われるが、内容は、原始宗教に於けるいろいろな儀礼について、その発生、発達類型などから、その様態として、物忌と断食、血に関する儀礼、火に関する儀礼等を論究するとともに、その現代的なつながりや意義などの関連性に及んでいて、宗教

家のみならず一般宗教信者にも非常に参考になる内容のものである。

その序文に「学究生活の場を僧門のうちに持ち、教化実践と学理探求とを併せおこのうことを日課とする筆者にとって宗教はその究局の性格において二面的なものであると考えられる。極めて常識的ではあるがそれは信仰と実践という二つの面の相即の上にのみ成り立つものと思われる」と言っておられる。

著者の言葉の如く、本書は、われわれの生活に力強い裏付けと反省とを与えられていると考えられる。

新興宗教の儀礼が現代人にアピールして引きつけている一因をなしているということを見た時、儀礼を単なる形式である一笑に付してしまっただけではないと共に、儀礼が発生した何千年何百年前の生れたままの時代のもものではあってはならないのではないだろうか、本書を通読して見て大きなサセシジョンを与えられたことに気付くだろう。

竹中博士は、東大の民族宗教学の大家宇野田空博士に師事されたのであるが、宇野博士なき今日、仏教界に於ける斯の面に於ける唯一の研究家であり権威である。

学としての研究家は東大にもあるが、仏教の畑から、しかも寺院を持ち幼児教育等の教化事業の実践をされながら、深く大きい研究を大成されたというところに、強い力と大いなる意義があるのである。

竹中教授には昭和三十二年三月に「宗教心理の研究」の大集成が出され、その一環としての今回の「儀礼の研究」が続いて出されたのである。その努力の絶倫、その精進の偉大さは全く驚歎の外はない。

仏教畑ではまれな、民族宗教、宗教心理民俗信仰の研究の大先達をもっていることはどんなに、ありがたく力強いことかわからない、更に今回は当然受くべき学位を得られたのである。こんなうれしいことはない、いつまでも私たちを指導していただくことをお願いして筆を擱く。(青山書院発行九〇〇円)

(内山憲尚記)

円光大師御影

宝瓶御影

村上博了

一

故人の肖像画は、いろいろの意味で意義深い、浄土宗祖（念仏元祖）法然上人の肖像は一般には「御影」と呼ばれている。その御影で現存国宝として有名なものは、京都知恩院と二尊院とに所蔵されている、前者のものは水鏡の御影と云われ後者のものは足曳き御影と云われる。

その製作と伝来の歴史に於て、又画そのものの「よさ」に於て、当代稀に見る逸品である。私共吉水末流のものがその在りし日の御姿を仰ぐことが出来る貴重な史料である。尚大師の御姿は諸所に多く伝えられるけれども、前記国宝御影の写しが多い。

併し宝瓶御影と仰

がれるものがある。

知恩院と高砂十輪寺

とに伝承されてい

る。宝瓶は勢至菩薩

のものであつて、大

師法然上人が勢至の

応現身と伝えられる

ことによつて御影頂上に、その宝瓶を見る

ことが出来るものである。

大師と勢至菩薩との関関について、御伝

には

上人は勢至の応現たりと云う事、世々こ

ぞりて、これを称す

と伝えられて、在世時代からのことであつ

た。

大師は、長承二年四月七日美作国稲岡庄

に生誕、幼名を勢至丸と名のられたのであ

る。小児にしてすでに勢至の知慧があつた

からではなくて、生誕と同時に名のられた

のである。ところが漸次に成長せられるに

従つて、御名の勢至菩薩のように、大変に

すぐれた素質法器であつた。

大師は、御名前のように、勢至の応現と

して修学に、求法に、護法に精進せられ

た。そして勅修御伝には、

(一)ある時、上人念仏しておはしけるに、勢

至菩薩来現し給ふことありけり。その丈

一丈余りなり、画工に命じて、其相をう

つしとどめられ、ながく本尊とあふぎ、

申されけり。

と伝えられている。御念仏が「助け給え南

無阿弥陀仏」と絶対他力であり、その功力

が宏大であつたのである。

(二)元久二年正月一日より、靈山寺にして、

三七日の別時念仏をはじめ給ふに、灯な

くして光明あり。第五夜にいたりて、行

道するに、勢至菩薩、おなじく列にたち

て、行道し給けり。

大師の行道と同列であつたとする。まさ

に応現せられたものである。

両説ともに、大師三昧発得後のことであ

り、元久二年はその七十三才に当る。

念仏に応現せられることは、阿弥陀如来

で然るべきである。しかるに前者の念仏中後者の別時会中に、勢至さまの応現は、尠くとも大師と深い関係があるからである。大師が応現であるから、その本地として来現せられたのでありとする。念仏を喜んでおいでになったのである。

仮令それが事実でないとしても、幼名を勢至丸と云い、晩年念仏中に勢至菩薩の応現と考えられるところに、大師の「智慧深厚」「生き如来」と仰がれた「社会の生きる灯」たる無限の価値を知ることが出来る。

二

宝瓶御影については、播州高砂市十輪寺に縁起が伝わっている。それは建永二年大師七十五才の時のことであつた。

大師が三月十六日伏見鳥羽の草津港を船出されて、廿六日に讃岐国塩飽島の地頭高階入道西忍の館に迎えられた。御滞在中に江口島に巡化されたとする。江口島光明三昧院記録によるなれば、同院には、後白河法皇々女如念尼公がすまわれていた。

尼公は大師の門弟である。尼公が、松虫鈴虫の両尼をひきとつて、念仏三昧に暮していられたのである。偶々大師が西忍館にあるを知つて特請され、別時念仏を開白された。尼公の墓の五輪塔は鎌倉時代の代表品として国宝に指定されている。ついで塩飽に教筵をもたれて後の専称寺を建立されたのである。高松法然寺本堂向つて左側に安置される滝宮法然上人像伝説には、塩飽より渡られた時、干ばつて悩む里人達の乞に委せて、百万遍念仏を修行して、慈雨を降らして田植を助けたとする。

小松庄福寺にはいられたのは初夏であつた。

大師が四国迂坐に當つて、年来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし云云

と云い、或は弟子西阿が時勢に従つて念仏をとどめてはと直言された時、

われたとひ死刑にをこなはるとも、この事ははずばあるべからず云云

と仰せられた。御心況は、生福寺にあつて

も、地人に伝化せられて止むことがなかつたのである。

三

或る日いつものように伝道からの帰途、綱の洲綾川のほとりを歩まれたのである。初秋のさわ風は、稔りの色を濃くして、人々の姿も畔道に見られた時のことである。お伴の僧が、なにげなく清らかな水面に目を落した時、大師さまの円光の中、頭頂上に宝瓶を見たのである。お弟子の知らせよりも早く大師は御氣付きとなつて、すぐにお姿を画きとどめられた。

世に宝瓶の御影と云われる。画は立像で左半見念珠をとつていられる。どの御姿にも見られるように右手を上左手を下にし古素絹大師衣の御姿である。

足には二蓮を踏んで動いていられることを現わしている。右の足を斜め左にして、綾川にうつる御姿を見ていられる。

御顔は半ば左むき小肥り慈顔温容である。他の各宗の高僧の御影には見られない逸品である。

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

菩提寺へのお詣りと各地の霊場、名利参拝の御利益、御功德についてお教え下さい。

——お た ず ね——

先日、機会があつて福井の永平寺に参詣しました。そして、あのような山の中に、しかも今から何百年という昔に、壮大な伽藍を造り仏道にはげんだ坊さん達のことを考えて、非常に感心しました。そういえば高野山でも比叡山でも、今日でこそ、バスも通り電車やケーブルカーの便もあつて、観光客が訪れますが、そういった交通機関のない昔に、山坂を越え、茹賣道心のご事のように苦勞してお詣りした人々は、本当に偉いと思います。

都会では無論のこと、田舎へ行っても、

この頃のお寺は、みんな町中にあり、電車通りに面し、バスの停留所の近くにあります。お詣りするのにも楽に出来ます。それなら、それだけ大勢の人々がお詣りするかと、いと、それ程でもありません。かえってわざわざ遠くまで汽車にのつて、善光寺詣りをしたり、身延へ登ったりしています。

先日は比叡山で観光バスが崖から落ちて大変なことになりましたが、何故、大勢の人があつて山の中のお寺へお詣りするのでしょうか。その方が何となく御利益も多きいかにもお詣りをしたような気がして有難い気がします。こんな気持ちで出かけるのでしょうか。

私の家の菩提寺は私の住んでいる同じ土地にあります。だから、行こうと思えば毎日でもお詣り出来るのですが、余り参らずに、永平寺など遠いところへ出かけるのですが、これはどういふことなのでしょう

か。いいことなのでしょうか、悪いことなのでしょう。来年は四国へ行く旅行会に入つて、毎月積み立てをしているのです。観光という軽い気持ちで行つてよろしいのでしょうか。

(横須賀市汐入町関田謙三)

祖先への感謝と自分の信仰の助けの爲といふことを考えて物見遊山の気分をのけて行くことです。

——お 答 え——

最近では観光ブームで、やたらに方々へ旅行することがはやるようです。旅行することとは無論結構ですし、その際に、社寺を参拝することもよいことです。ただ、信仰などはそっちのけで、物見遊山のつもりで騒いで来るといふのではなりません。

大体、日本の社寺は本来は山の上か山中に造られるのが常道でした。これは、むずかしくいふと、日本人が古くから持つて

いた山嶽崇拜と深い関係にあるものですがそれはとにかくとして、おっしゃるとおり昔のお寺は大体山につくられました。現在でもお寺に「山号」というものがつけられています。華頂山知恩院、三縁山増上寺、金竜山浅草寺というように。

お寺が山の中や上につくられた一つの理由は、仏教とは元来「出家道」で、家をすてることが第一歩で、そのためには町や平地ではなしに山に入らねば「俗塵」を断つことが出来なかったわけです。そして、清浄な山気の中で、無垢の心身で仏道修業にはげんだのです。ところが、時代が経つにつれて、山の中でひとり修業をしていたのでは、肝心の衆生済度をする事が出来ない。大勢の人に仏教をひろめるには、山を下って町に入り、大衆と交わって行かねばならぬということになりました。こうした考えをもっともはっきりと打ち出されたのが法然上人で、それまでおいでになった比叡山から、京都の町にお出になり、東山のふもとに庵を結んで、大衆のために念仏の

教化を垂れたのであります。町中にお寺が作られるようになったのは、仏教を大衆のためにひろめようとする気持ちからだったのです。

このようにして、日本の寺院は二通りの形で今日に及んでいるのです。一つは、昔のままの形で、山の中か、人里遠いところ主として坊さん達自身の修業を目的としているもの。他の一つは、町中で民家と軒をならべ、主として大衆の教化を中心としているものとです。むろん、これは一応の区別でして、中にはそうでないものもあります。

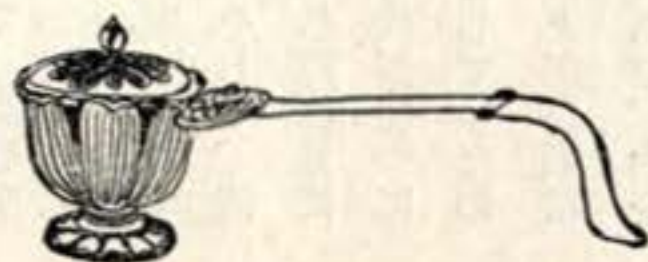
そこで 私共は日常仏教を聴聞したり、先祖の供養をしたりするには、町中の菩提寺へ参詣します。そして、年に一回か、時たまには、身も心も改まるように、深い山中にある古寺を訪れて、静閑な氣に浸ることも必要です。ことに最近のように、さわがしい社会の毎日に暮しているものにとつて、古寺巡拝は魂のリクリエーションになります。ですから、大寺、本山の参拝もそ

うした心構えでなさるのなら、非常に好ましいことです。その上出来るならば、自分の宗旨の本山へは、時たまお詣りしたいものです。

この頃のように観光旅行がはったのは、折角、静かな氣分を味おうと山の中へ入っても、バスの騒音と人々の群れとでかえって不愉快になることもあります。またお寺の方も営業的になって来たようで、余り感心しません。しかし、自分の信仰のためだということをしっかり心に刻みつけておれば、そうしたことにわずらわされることも少いでしょう。そしてまた、必ずしも有名なお寺でなくとも、ひと知れぬ幽邃な山地にひっそりと静まる庵寺に、案外、魂の糧がみちあふれている場合もあるのです。

おねがい この欄への御投稿を歓迎致します。どんなことでも結構です。必ずしも信仰と直接関係のないことでも、あなたのなやみや御不審をおきかせ下さい

お彼岸さん



中村康隆

暑い寒いも彼岸まで、といいますが、まったく暑ければ暑いでヤレヤレ彼岸になったかと思ひ、寒ければ寒いで早くお彼岸になればよいかと願うのが、世の常の人心ひとこころというものでしょう。

彼岸桜秋は月こそ西にあれ

(宗因)

の句にもあるように、春は曙あけぼの 草の名のある桜、秋は西に傾く名月の頃、待ちあぐねたお彼岸さんがめぐってくるのです。春は春でホノボノと心楽しく、秋はまた秋でおのづから心のなごむのを覚えるのも当然といえましょう。

あのかしましかった蟬時雨もいつか衰えてしまい、気がかりな八朔と二百十日もまづまづすんで、どうやら今年も豊年らしいと、ホツとした心持で、今ならさしづめ映画でも見にいかうかといった気分を起し易い頃、昔の日本人はそうした怠け心をまづふりはらって、生きながらえ得た幸さいを謝し、更によりよき生命いのちの幸さいを願って、御先祖供養のためにとお墓詣り・寺詣り・年忌法要などの諸仏事を営んだり、身体がたっしゃになるとか、後生のためとかいって、山行きや六阿弥陀詣もつでなどの彼岸の諸行事をつとめたものでした。いまでも位牌や仏壇の新調、墓石の造築とかまたお年忌なども、彼岸の中にするのがよいとする習わしが見られます。

○

なかには、ちようどお盆と同じように、迎え火や送り火をたく風も、あちこちに見られます。北秋田から鹿角郡あたりでは、オオジナオバナ（祖父祖母）といって、春彼岸の初中終の三度、家々から、藁や芋殻を持ち出して夜に入って墓場に積んで焚くという。あるいは万燈火（マンドビ、マトビ）野火（ノビ）などといって多くは終りの日に岡の上に登って焚くところもある。その前に子供たちが村内をまわって「野火の藁コけてたんせ」と謂って藁を貰め、それを平年ならば十二カ所に積んで焼くところもあり、また扇田附近の村など二カ所に集め、一つは子供の火、一つは仏様のあたる火といってもすところもある。以前はこの火を燃すときに、

おおじなおばな

あかしもよいし

提灯もよいし

早く茶コ飲むに来とうらエ

来とうらエ

と唱えたといえます。この習俗は百数十年前の記行文（芒の出湯）にも記されており、彼岸入りに墓地近くの塚原に子供が集って藁を焚き、

おおじなおおばな

あかりいに来とうらい来とうらい

と高唱したといい、この火を纏い火といったとあるそうです。マトイビはもちろん万燈火の誤訳です。

こんな唱え詞は、中部以西の諸県にもあるが、すべてお盆の精霊迎えや送りに使われています。しかし、こういった風習は、われわれの先祖がお彼岸さんを盆や正月や十夜などに劣らぬ先祖供養の機会と考えたからに外ならないからで、いまでも通常お年忌や仏事に最適の週間とされているのも、なるほどとうなづけるでしょう。

一体、お彼岸という言葉は、梵語の波羅蜜 *Pāramitā* の意識「到彼岸」の略語で、布施などの六波羅蜜（六度）を修すれば世俗の迷いを離れ得るというところから、春分・秋分を中心に一七日の別時の修養を勧めた日本独自の仏教行事といわれています。

今日彼岸菩提の種を蒔く日かな

（蕪村）

いうならば善行週間とも名づくべきで、近頃はやりの○週間（元祖ともいってよいでしょう。そこで、本来は、お中日（極楽を拝む日、阿弥陀さまの救いを願う日）を中心に施戒忍進定慧の六度を六日にふりあてて一日一善を心がけるのもふさわしいと考えられます（本誌昨年三月号参照）

が、実際は、ほとんど、このように先祖供養の週間となっているのです。

○

というのも、庶民の古風な考え方では、日常生活の吉凶禍福は、すべてこれ、何程かの靈魂の働きの影響下にあるとする、所謂シヤマニズムの信仰に強く支配されているからです。靈を粗末にしたり祀らなかったりすると、何らかの祟りがあらわれる、と、今日ある種の新興宗教の説くのも、この古い庶民の感覚につけこんでいる訳です。昔の庶民は、しかし、今時はやりの新興宗教に走るといようなことはせず、素朴でも昔ながらのやり方で御先祖祭りを、人生や季節の折り目、切れ目に営んだものなのです。

そこで、その御先祖祭りにも、とかくその底流として亡靈宥和の思想のひそんでいるのも当然といえるのでしょうか。

遠州は森町から秋葉街道を北へ約六キロの山村、静岡県周智郡天方村では、毎年秋のお彼岸がやってくると、西俣部落の観音堂に村中の善男善女が集って、七日間昼夜ぶっ通しで鉦を叩いて念仏をあげるといふ。その昔慶長年間に部落に熱病が流行して死者が続出したところから、長老の発起で部落民一同が観音堂にこもって七日七夜鉦を叩いて

薬師観音に熱病の平癒祈願を行ったのが起りだと伝えていふということ。今でも五十数戸の部落民は女子供まで惣出でお堂に詰めかけ昼夜交替で七日間休みなく鐘木しゅもくを握って鉦をならして念仏を唱えて厄病除けの祈願をするということです。

こうした風習を私たちは村祈禱と呼んでいます。はやり病の時とか稲や畑の虫がわいて困った時とかに、百万遍の珠数を繰ったり鉦太鼓を鳴らして念仏を唱えて送り出したり大般若をして祈ったりする風は、今もあちこちの村で行われているのです。

○

ところで、こうした実修の姿のうちにこそ、お彼岸の行事が、わが国独特の風習として成立成長した因由を、見出し得ようかと想われます。

六波羅蜜を修する好期として春分秋分の頃が選ばれたについては、通常、それが昼夜均分の日として印度などで時しょう正ちやうまたは中道ちゆうどうと呼ばれた好気節に当るために、中道を尊ぶ仏教徒の修養修善の好期として奨揚されたからであろうといわれます。それで提謂経とか浄土三昧経等に春分秋分等の八王日の齋戒を説いているとされるところから、日本でも鎌倉期以後彼岸功德成就経、到彼岸経、彼岸齋法成道経

竜樹菩薩造天正驗記、同檢鏡等の偽作の諸書が流布されたといいますが、いづれも道家の説に附合したもののようである。仏教本来の姿のようではありません。もっとも印度での彼岸の行事は実証されませんが、中国などでは似通った風が全く見られなかった訳でもないようですから、今日の發展した彼岸風俗は日本独特のものといえても、やはりその基盤となった習俗はあったわけで、しかもそれは日本だけに限ってよいわけはなかったらうと思われまゝ。

現に燕京歳時記（岩波文庫本、北京年中行事記）には、春分や秋分の前後、清朝の風として大臣や王候貴族たちが祖宗の祠廟の祭祀を行ったと見えており、漢民族の風といえぬまでも、一部満人の間に彼岸の先祖祭の行われた一斑は示すものといえましよう。朝鮮でも春の寒食日（冬至後百五日目）、秋の秋夕（旧八月十五日）には先祖を祭り墓詣りをする。日本でも彼岸前後の頃に、こうした祖霊祭りに類したことがあって、次第に彼岸行事として發展したものと想われるのです。そしてその因由には、前に述べたように、亡霊の鎮撫と厄払いとを大きな要因としたように想えます。

○

日本にも、中国や朝鮮と同じように旧暦二月八月の上の

丁（ひのと）の日には、^{せきてん}釈奠と呼ばれる孔子祭が早くも文武天皇大宝元年（西紀七〇一年）二月丁巳以来行われ出したのですが、仏教側のお祭りとしては、同じ春秋二仲月を期に「^き季の御読経^{みどきよう}」が行われるようになりました。記録としては続日本紀に聖武天皇天平七年（七三五年）八月丙辰宮中で大般若経及び最勝王経を転読させたのが初見とされています。この季の御読経の風習こそ、今日の彼岸会の前身だと想われます。

さて、従来、彼岸会の起りは、日本後記十三に見える桓武天皇延暦二十五年（大同元年、西紀八〇六年）三月辛巳（十七日）の「^{すどう}崇道天皇の奉為^{みため}に、諸国の国分寺の僧をして、春秋二仲月別して七日、^{こんごうはんにやきよう}金剛般若経を讀ましむ」の記事とするのが通例です。その太政官符も類聚三代格三に収められているが、崇道天皇とは前皇太子早良親王^{さわら}のことです。天皇の称号も一にその怨霊を鎮められるためであったが、御病床につかれてからも誦経、造塔、度僧、大赦など行わせられる外、特に同親王のためにと読経、写経、経料施与、改葬などされたのだったが、特に廿四年二月には六日怨魂慰撫のため僧百五十人に宮中及び春宮坊等で大般若を讀ましめ、靈安寺に小倉を施与され、十五日度僧、十九日諸国々分寺に薬師悔過を行じ、廿二日僧尼を度^どせられ、

更に八月九日にも最澄（伝教大師）を殿上に召して悔過読経せしめられ、廿五年二月廿三日には五百井女王が薬師佛像を造写したのが出来て前殿で齋会さいえを設けられており、遂に三月の太政官符となつて、その日遂に程なく齡七十で崩御せられています。このように二八両月を重視せられたのも、結局はこの両月に季の御読経の催おされる習わしがあつたからに外ならないといえましょう。

その後、続日本後記しよくにほんこうきによると、仁明天皇（西紀八三四—八五〇）の時にも、しばしば君主の安穩・人民の和樂・疫乃至は物恠ものけなどのために、春秋二仲月に一七日の仏事殊に大般若の転読などを催した記事を散見します。一体、玉体の御不予とか疾疫流行とか凶事のある毎に仏事を営む例は以前にも多かつたのですが、これらの二史書の記事から考えてみても、おおむねこの頃からお彼岸月一七日の仏事修行が盛んになり始めたといつてよからうかと想われます。更に下つては延喜式えんぎしき（西紀九〇五年撰）巻第二十五主税寮の記事中にも「凡そ諸国、春秋二仲月各一七日、金光明寺に於て部内の衆僧を請じて金剛般若経を転読せよ」とありますから、延暦年間以後の風が当時次第に固まりつつあつたことを知ることが出来ましょう。

そして蜻蛉日記とか源氏物語卷二十九、四十七などの平

安朝文学書になると、彼岸に入るとか彼岸の初めまたははてなどの文字が現われ、「いとよきひ」として精進齋戒の善根日とされたのでした。彼岸という言葉が漸く一般化された訳で、台記・兵範記ひょうはんき・看声御記かんもんぎなどの平安末葉の日記類には盛んに用いられています。

○

こうした平安朝になつての彼岸会ひがんえの興行こうぎやうについては、中葉以後の浄土教の興隆も大きな役割を演じたのでした。初めに記したようにお彼岸の民間習俗には多分に亡霊の慰撫宥和が主な要因となっています（祖霊供養もむしろそこから行われたのでしょう）が、亡霊回向には念仏が最上とされてきたのが上代以来の風でしたから、お彼岸行事に浄土教関係の影響が強く働いたのも無理からぬことでしょう。

殊に極樂願生の心がまえから、お中日あさひにちの日没を拝む風が起つてきました。お中日には、お日様が真東から昇つて真西に沈むというので、正しく極樂の方角を指すというところから、この日の落日を拜んで日想観にっそうかんを修する風が起つて来た訳です。それは善導大師の観經疏くわんぎんそ（定善義じやうぜんぎ）に「唯春秋の二際のみを取る。其の日正東より出でて直に西に没すればなり」と説かれている観經の日想観への解釈に従うものなのです。そして同じ観經疏（散善義）の二河白道にがびやくどうの喩え

に、娑婆を東岸、極楽を西岸と説いているので、彼岸会と
いった呼び名もそこから起ったものだろうという説さえあ
ります。平安朝の有名な歌人俊成郷が美福門院から極楽
六時讃の絵に書く歌として求められた一首として

今ぞこれ入日をみても思いこし

弥陀の御国の夕暮の空

という歌が新古今集に収められていますが、特に大阪四天
王寺の西門、石の鳥居は正しく極楽の東門に対していると
いうので、この日の入日を拝む日想観でにぎわうので有名
となりました。この石の鳥居には、聖徳太子の筆とされる
「釈迦如来転法輪所、当極楽土東門中心」の額があり、梁
塵秘抄などにも

極楽浄土の東門は難波の海にぞ対へたる

転法輪所の西門に念仏する人まいれとて

といった当時の愛唱歌が収められていますように、平安末
葉以来お彼岸といえは天王寺詣りといわれてにぎわうのが
例なつてと今日に及んでおります。室町時代の作品である
謡曲の「弱法師」は、高安某が春の彼岸に天王寺で一七日
の施行（施波羅蜜の行）を行つて、今は盲目となつた吾が
子俊徳丸と巡り会い、あたかもお中日とてこの石の鳥居か
ら共に遙かな落日を拜んで西方極楽を欣う日想観を修す

ることを、筋としたものです。

しかし、極楽願生の信仰の高まりから、この西門の日想
観の風が起つたとしても、今日の民俗を見ても分るように
一般の天王寺詣りには、お彼岸には御先祖さまが天王寺に
集まるといった信仰があつてのことのようにいわれます。

天王寺には六時堂などがあり堂念仏やらお彼岸の念仏会が
催されたところからそうした祖霊回向の風が生まれてきた
のでしょう。浜松市鴨江の観音もお彼岸には祖霊たち殊に
新亡の諸霊位が参詣するからといつて近在から広く参詣者
が集まつて大変なにぎわいで、全く天王寺と同じような風
が見られます。

こうして、お彼岸と念仏とは、平安中期以後次第に密接
に結ばれるようになりました。それで法然上人の出られた
頃にも、お彼岸には盛んに弥陀念仏が催されました。本朝
世紀によると、久安六年（一一五〇）八月廿五日、鳥羽法
皇が鳥羽殿で彼岸の御念仏を行なつておられ、康治元年
（一一四二）二月・八月、久安三年（一一四七）八月、同
五年八月にも鳥羽阿弥陀堂の念仏を行つておられる。兵範
記等にも、久寿元年（一一五四）八月十日鳥羽成菩提院の
恒例彼岸念仏会（十七日結願）に鳥羽法皇と崇徳上皇の御
二方の臨御、仁安二年（一一六七）八月三日成菩提院彼岸

念仏始め（十日結願）、嘉応元年八月廿五日彼岸始めとて後白河法皇が不断念仏を修せられ、同日鳥羽成菩提院の念仏に臨幸され、御読経の日時を改勘させられている記事がある、といった具合ですから、その他一般在俗にもかなり流行したと推察されるのです。

○

このお彼岸が暦の上に記されるようになったのは、もと比叡山の坂本二十一カ所の談義所で彼岸の説法が行われ、都鄙の善男善女が聴間に集まったので、その時期を一般に知らせるため、叡山で暦家にたのんで暦の上に載せてもらうようになったため、いつか時候のようになったといわれます。一方では暦、一方では日想観、そこからお中日中心のお彼岸週間が固化してきたものでしょう。そして江戸時代には中日後三日目を初日としたこともありましたが、明治の改暦からまた旧に復して前後一週間ときめられたのでした。

こんな風で、お彼岸の本来の意味は六波羅蜜の修行を勧める筈のもので、金剛般若や大般若が読まれたのもそのせいですが、やがてそれが亡霊得脱の祈願となり、そして念仏信仰や浄土願生思想と結びついて、往生を願う最好期として念仏会ねんぶつなどが催され、それがそのまま祖霊回向の好

期とされるようになって、殊に近世以後今日に至るまで一般には殆んど仏事の週間とも見られるような風に転化したのですが、その根には古くからのシヤマニズムの崇るた霊の慰撫の考えが流れており、また時期的にも農繁期を迎える頃に当るために、そうした何らかの儀礼的実修を求める農民の心情も動いていたことでしょう。

江戸時代の日次紀事にちじきじや東都歳事記その他の、民間行事を記した書物などを見ても、「彼岸中、専ら仏事をなす」となると記しています。京都の東山の靈山寺や空也堂、五条橋西の御影堂などの時宗の寺院や大阪四天王寺の念仏堂などでは念仏踊りが催されたり、また彼岸のうちにたまたま親戚の忌日があると茶菓を供えて祭り、また親戚知友等に茶の子といって茶菓の響応贈答をしたり、経を読むといって焼酎をたべる風があり、また熊野比丘尼を呼んで、地獄極楽の絵説きをさせたり、巫女を呼んで口寄せを行ったり、更に念仏講中では毎夜頭人とうにんの宅に弥陀像を掲げて鉦を叩き高唱念仏をし終りを特に高く早く唱える責念仏せねんぶつにしたことが行われたといえます。江戸では浅草寺や増上寺の山門開きがあって山門の登拝を一般に許したそうです（増上寺は今でもやっている筈です）。また江戸の六阿弥陀めぐりといつて、一番上豊島村元木西福寺・二番下沼田延命院・三番

西ガ原無量寺・四番田端与楽寺・五番下谷広小路常楽院・六番亀戸常光院の各寺々を廻ったりしたものでした。そのほか山の手六阿弥陀（麴町十丁目心法寺・四谷寺町西念寺・青山南町竜泉寺・同梅窓院・同北町高德寺・同善光寺）西方六阿弥陀（西久保大養寺・飯倉靈長寺・三田春林寺・高輪正覚寺・白金正源寺・目黒祐天寺）もありました。この風はつい近頃まで残っていたもので、子規の句にも

野の道や梅から梅へ六阿弥陀

というのがあります。

○

この六阿弥陀で想い合わされる民俗に、日の伴とか七つ鳥居とかと呼ばれる行事があります。

柳田翁の歳時習俗語彙や西角井氏の年中行事辞典などを参照されると面白いでしょう。丹後・紀伊・播磨等の諸地方では、彼岸の中日とかその一日とかまたは社日などの行事として、日の伴・日迎え日送り・日天様の御伴・御伴・ヒマカイ（日迎え）といった名で呼ばれている、当日朝早く東の方の社寺や地蔵尊に詣って日の出を迎え、順次に南から西へと廻って入日を送って賑るとか、あるいはまた、午前中は東に向い午後は西の方へと歩くとかといった習わしがあります。また広島県雙三郡では七つ鳥居といって秋分の日に七つ鳥居をくぐると中風にならぬといい、山梨県

でも春の社日詣でにやはり同じことをいって連立って神社を巡拝する風があり、伊豆の韭山辺ではお中日に鳥居詣りを行うそうです。筆者所在の清水市辺でも社日には春秋とも観音講中では連立って石の鳥居の七所詣りをしていきます。一国三十三番の観音巡りを彼岸にする風も見られます。六阿弥陀廻りもこうした風の浄土教化として大変面白いと想います。

その外、九州阿蘇山麓地方では、春秋とも山に登る風があり、彼岸籠りと呼んでいます。薩摩にも中日に山登りをする風があり、鳥帽子嶽などへ登ったそうです。愛媛などでは盆の生きみ魂のように彼岸養いといって嫁が実家の親を販省したり子が両親を招いてもてなしたりする風もあります。上総の富津では彼岸中に忌日があると八重に当たるといって、牡丹餅かおはぎを作って近所に分けるといいます。

私達の祖先は、大切な食料の米を工夫して、お供えものを作って亡き祖霊たちに供え、そしてそれを分かって食べることによって、明日への新しい活力を御先祖から分けていただいたような気持になり、忙しい農務に立ち向かったことでした。こうした生活のひきしめにこそ彼岸さんの行事の意味の底があったのではないのでしょうか。

（大正大学講師）

扉の御法語

極楽には上品、中品、下品の三つの等級があり、その一つ一つが更に上生、中生、下生と分れていますので、全部で九種類のクラスがあることになります。上品は仏教の篤信者ともいうべき人のゆける場所です。仏教と申しても小乗といわれるものもあり、人の説法を聞いて、その真似しかできない人もありますが、これらの人は中品にゆかれます。しかし世の中には、もっと沢山の悪業の人があります。

私ども仏さまの前でお勤めをし、お念仏を唱えますが、それが終ると、すぐ怒ったり嘆いたり、他人を悪くいったり様々の悪業に身をゆだねます。もっと極端な場合なら、十悪五逆といわれる極悪の人も世の中にはいるわけです。しかしこんな悪人でも、お念仏を唱えることによって下品に往生することができます。従ってどのような人でも阿弥陀さまの本願を信じ、お念仏を唱えることによって、まちがいなく極楽に往生できます。

だからと申して悪人でもよいということになりません。及ばずながら善根を積み、上品を願うべく努力しなければなりません。

さて御法語では、上人が上品をねがう事は御自身のためばかりでなく、実はそのこ

とによって衆生を教化したいからだと言されています。このことを一言でいえば、菩提心であります。

菩提心とは、上は覺りの仏智を求め、下は衆生を教化しようとする心であります。ところが人間の心はいつも狭く、自分の安楽のためとあれば、実によくがんばり努力しますが、他人のこととなると、目の前のことでも、そっぽを向いてしまします。

み仏の心は一切を平等に救済しようというところに中心があります。現に阿弥陀さまは極楽にあって説法を続けていながら、衆生のためにいつどこへでもお出かけになります。

お経の中によく「願くはもろもろの衆生と共に安楽国に往生せん」の句が出てきますが、これは自分独りが安楽国に往生するだけで満足せず、衆生と一緒にゆきたい、衆生を一諸に連れてゆきたいというのであります。これまた菩提心の現われで、衆生とともに浄土に往生しようと願うことでもあります。

そして極楽とは楽しい人居する場所ではありません。おくまでも凡人の世界、悪のうようよしている世界を教化せんがために、極楽往生を願うのであると上人は申されました。現在の住み難い世の中に、上人の御精神が余りにも行われていないことに気がつきます。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

九月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年七月廿五日 印刷

昭和三十五年九月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 竹中 信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円一八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円一八円

側々と人の心を打つ失明の体験

森 赫子

文学の世界からみた無常の話

武田 泰淳

宗教の信仰の遺文にみる

佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に
お一人でも多くの会員をつくって、正しい
信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利
用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

大正大学教授 竹中 信常 著

宗教儀礼の研究

青山書院刊
A 本文三八〇頁
定価九百円

宗教は実際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところは、信仰と儀礼の一致相即である。本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめる。

内容 序説 宗教儀礼の意味

第一編 儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼

第二編 儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼

結論 礼儀と信仰

特価 800円
送料当方負担

ヤスパース著

大正大学講師

峰島 旭雄訳

仏陀と龍樹

理想社刊
B 本文二五〇頁
定価三三〇円

現代西洋の卓越せる哲学者ヤスパースが十年の歳月を費して公けにした論著。西洋哲学の立場から仏教を新しく評価解釈し、これをきわめて平易な言葉で敘述している。

東京都品川区上大崎一の七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十五年八月二十五日印刷 昭和三十五年九月一日発行

浄土

第二十六卷

第九号

定価金五拾円(送料)

日本一の生産・設備

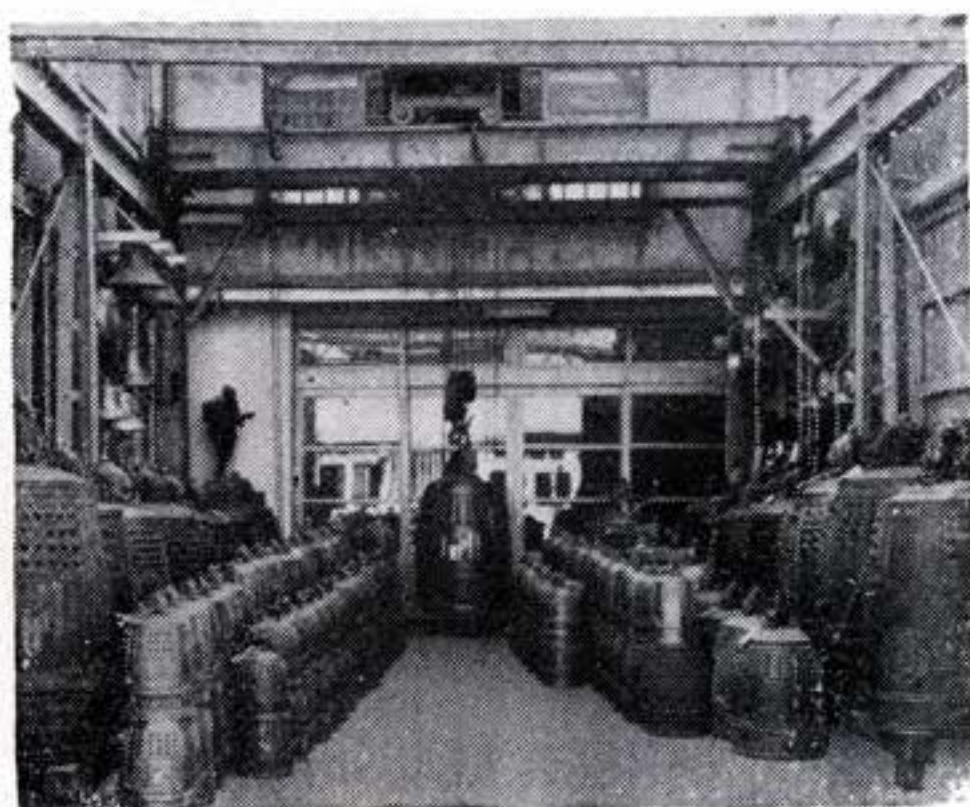
梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞

(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田